『新しい年の音を感じて』

校長　鈴木　康史

あけましておめでとうございます。30 秒ほどフライング気味に始まった汽笛の共鳴が、港･横浜の年明けを告げました。浜っ子の自分にとっては、これを聞かないと年が明けた気がしません。横浜港３カ所同時の花火を目にして汽笛を耳にすることで、新しい年を感じ新たな気持ちを抱くのです。本年もよろしくお願いいたします。

行動制限がかからないまでも、各種感染対策をしての年末年始を過ごされたことと思います。久々にしばらく会えなかった人に会えたり、様々なつながりを感じたりしたこともあったのではないでしょうか。人のつながりや励みに、声を交わす、声をかけることが大きな役割をなしていることを感じます。サッカーワールドカップでは、声援のあるスポーツはいいなと感じましたし、冬休みの各種スポーツイベントでもルール内での歓声や応援が聞こえることにも高揚感がありました。

20 年前に「総合的な学習の時間」で取り組んだ箱根駅伝を、１月２日、３日と、３年ぶりに８区間９カ所で「追っかけ」しました。ここでも、例年監督から選手への声かけが話題になりましたが、そこである音の変化に気付きました。

今年は、声援がなく拍手が響きました。人が少ないところの方が声を出しているのも感じました。ある大学のサポート（走らない部員が声かけやタイム差をボードで知らせる）の横にいたときは、屋外でマスクもしているので部員くらい声を可能にしてもいいのにと思いました。そして、なにより変わったなと感じがしたのは、新聞社が配る旗の「バササササササ・・・」の音が消えたことです。この旗も、木と紙から分別不要なオールビニルになり、これからはどうなるだろうと思っていたところ、配ることも振ることもできないので「なし」となったようです。旗の音がせず声もほとんどかからない拍手だけの沿道は、とても新鮮に感じました。

10 年ほど前には、監督の乗る車が初めて PHV になり、団子状態の１区の集団走

の後ろを20台全く音のしない車が通ったとき、ものすごい違和感と「未来」を感じたこともありました。旗がなくなったことで人の後ろからでも実に見やすいだけでなく、沿道を彩る音として「拍手の帯」が200Km、11時間に渡って続いていることがすばらしいなと思いました。

ONLINE 開催の会合やリアクションできない講演会などの無音は空虚を感じます。一方、教室を回っていて授業で子どもたちが対話をしている姿を見るとほっとします。年末に参加した久々集合での会議では、人が集うということは、対話をして学ぶ、合意する、創りだすことに意味があるということを実感しました。新年からの教室にも、新しい年の子どもたちの音が響いてくれることを楽しみにしています。